

優秀賞（t v k賞）

## 池に行け

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 <sup>たきざわ</sup>滝澤 <sup>さほ</sup>咲歩



「広い世界を見なさい。」

大人はこう言う。「狭い世界」よりも「広い世界」の方が好ましい、この考え方は今や世間の一般常識である。私はこれに対して、少なからず抵抗を覚える。誰でも広い世界に適応できると、そう考えるというのか。

井の中の蛙大海を知らず。このことわざは誰もが聞いたことがあるだろう。自分の狭い知識や考えにとらわれて、他の広い世界を知らずにいること。大海は知っておくべきである、という戒めの意味も含まれている。古人も広い世界の方がいいと考えていた。

しかし、広い海を知った蛙は幸せだったのだろうか。よほどポジティブな蛙なら別だが、自分よりもすごい者の存在を知って衝撃を受けていたりはしないのだろうか。海を知る前に戻りたいとは思わないのだろうか。いや、たとえそう思ったとしても、元に戻れはしない。それに、実際には蛙は海で生きていくことなどできない。私の勝手な解釈になるが、そこで暮らせないのに海を見るなんて、一体何のためにこんなことをしているのだろうか。たとえ井戸に戻ることを選んだとしても、今いるのは狭い世界の中だと知っている。もっと広い世界があることを知りながら、それでもその世界に身を置くことはできない。——そんなの、あまりに虚しい。

私が言いたいのは、広い世界を知ることが良いとは限らない、ということだ。広い世界を知ること、傷つくこともあるからだ。私も、身に覚えがある。小学生の頃はテストの点数も良く、ある程度の成績も取れていた。だが、中学生になり様々な人と出会い、自分以上に勉強ができる人がたくさんいることを知った。さらに、それは勉強に限ったことではなく、誰もが「自分にしかできない」ことを持っているように思えた。それまで自惚れていたのだろう。反動は大きく、しばらく自信を失っていた。これは、世界は広いと教えてくれた大切な経験だったに違いない。しかし、小学生の時のような狭い世界の中で酔っていたかったとも思った。「自分に都合の良い世界で楽に生きていたい」という意味に受け取られるかもしれない。それを否定はしないが、楽に生きることも時には大事だと思う。

また、このことわざには、後に続きが付け加えられている。「井の中の蛙大海を知らず。されど空の深さを知る」

と。井戸の中にいる蛙は海こそ知らないけれど、空の深さは知っている。それに、海を知っている鯨は井戸の中は知らない。狭い世界しか知らないからこそ、一つのことを突きつめて考えれば、より深い知識を得ることができる。例えば、歴史上の偉人も常識を知らないことがある一方で、一つの分野に関しては誰にも負けないほど詳しくあったりする。「されど空の深さを知る」という付け足しは本来なかったものだが、こう考えると前向きな意味としても捉えられる。

ただ、海を知ることが良いとは限らないけれど、海を知ってはいけないうけではないとも思っている。「海を知るべきだ」と考えるそれ相応の理由があり、そう考える人が大勢いたから「井の中の蛙大海を知らず」が作られ広まったのだろう。このことわざに、全面的には賛成できない。しかし、全てに反対したいのではない。私がベストだと考えるのは、「池」。井戸の中に住んでいる蛙は、一度池に行けばいい。きっと、もっと広い世界を見たいポジティブな蛙は海へ行くだろう。もし井戸の方が性に合うと感じるなら井戸に戻るし、池がちょうど良ければそこに住みつく。ちょっとだけ広い世界を覗き見て、あとは各自で判断すればいい。

人間だって同じだ。誰もが同じ感性を持っているわけではないのだし、自分の好きな広さの世界で生きていけばいいと思う。それを一概に「広い世界」に閉じ込めるのは、やはりどこか違う。どうすべきか迷ったら、池に行け。私はそう言いたい。